

様々な角度からの回顧

比較文学者
張競



×月×日

人間の一生のなかで絶対忘れられないことがある。とりわけ個人の体験が歴史の出来事と共振し、かつ多感な青春と重なる、なお一層深く心に刻まれる。四方田大彦『ハイスクール1968』（新潮社 一六〇〇円＋税）にはそんな青春の日々が記録されている。

高校生の目を通して見た時代像は新鮮だ。大人たちの感性と違って、紋切り型にはまらないからだ。むろん筑波大学附属駒場高校の前身である東京教育大学農学部附属駒場高校に進学した四方田少年は平均的な高校生とは言えないかもしれない。何しろ高校在学中に独学で大学教養課程の数学を勉強し終えたのだから、

いわばエリート中のエリートであった。驚異的な読書歴、前衛的芸術の体験、政治の季節風にさらされた日々、数々の交友関係。いずれもエリート高校でないとは体験できなかったものであろう。ただ、本書で描かれた時代はどのような高校生にとっても同じであるはずだ。エリート高校生にかぎらず、ふつうの高校生にとっても、あの時代の、芸術を尊ぶ気風、批判精神を評価する雰囲気は変わらないものであったろう。

この本をただの青春の回想記として読み過ごしてはいけな。著者が高校一年から大学入学まで過ごした四年間は、ちょうど学生運動が盛んな時期であった。高校でもその余波を受けて



『ハイスクール1968』

彼らがいかに自分たちの将来について議論し、どう行動したらよいかについていかに悩んだか、手に取るようにわかった。それだけに、夢が破れ去った後の、

彼らの傷ついた姿はいかにも痛々しい。これまで団塊の世代について多くのことが語られてきた。一方、六〇年代以降生まれの若者は「新人類」と称され、一時大きな話題を呼んでいた。しかし、五〇年代生まれの人たちは団塊の世代と新人類のあいだに挟まれ、ほとんど注目されてこなかった。現在、言論界をはじめ、各界で活躍している人のなかに五〇年代生まれの人は少なくない。にもかかわらず、彼らは自らをほとんど語ろうとしなかったし、自分たちの生きた時代を問題にすることあまりなかった。全共闘に比べて、高校紛争はいかに子供じみている、と彼らは思っているのかも

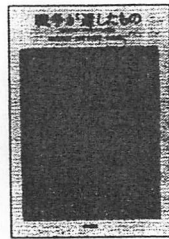
×月×日

『ハイスクール1968』には三十数年前のことが記録されているのに対し、鶴見俊輔、上野千鶴子、小熊英二の『戦争が遺したもの』（新潮社 二八〇〇円＋税）は戦中や戦後六十年について語ったものである。戦争体験や戦後の政治運動についての本は数え切れないほどあるが、本書を読んだら、語るべきことはまだまだ多くあることがわかった。この本は六〇年代生まれの小熊英二と、団塊の世代

の上野千鶴子と、戦中派の鶴見俊輔の鼎談集。厳密に言くと、鼎談というより、インタビューの記録に近い。小熊英二と上野千鶴子が聞き役で、鶴見俊輔はもっぱら二人の質問に答える。

書名の中の「戦争」とは当然、第二次世界大戦のことだが、同時にベトナム戦争をも指している。太平洋戦争の真っ只中にアメリカから帰国し、海軍ジャカルタ在勤武官府に軍属として勤務した鶴見俊輔にとって、軍隊での体験は「殺人をさせる」という思想信条の出発点である。六〇年代から携わった平連の活動もその体験を踏まえている。本書ではこの鶴見俊輔が思想家としての鶴見俊輔にどのような影響を与えたかが詳細に語られている。

それにしても二人の質問は容赦ない。所々、読むほうにははらはらするほど厳しいものがある。鶴見俊輔はさすがに年季が入っていて、苛烈な質問にも激することなく、一つ一つ丁寧に応対している。見事なチャプラーのおかげで、戦前



『戦争が遺したもの』

戦後の重要な歴史的事件や人物像について、貴重な証言を得ることができた。

個人的にもっとも興味を覚えたのは、思想家としての鶴見俊輔の本音に迫ったところである。小熊英二が三島由紀夫の自殺について感想を聞いたら、「偉い奴だ。いい奴だな」と思っていた、とあっさり認めた。また、一九六〇年に社会党委員長浅沼稻次郎を刺殺した右翼少年の山口二矢のこと

も「いい人間だ」と感じは強く持つ」と告白した。小熊英二は、丸山真男のほうに心情倫理より結果責任を重視していたのではないかと、水を向ける。鶴見俊輔はすかさず軍歌好き丸山真男のエピソードを披露してやんわりと反論する。そのかたわら、上野千鶴子はさりげなく原則的な立場を確認する。そのあたりのあうんの呼吸は絶妙である。

日本の知識人は個人の損得を度外視して命を差し出す行為を過剰に評価する傾向がある。そのかわり、何のために死ぬかは必ずしも問わない。とにかく、死ぬことが美德だ、自らの命を絶つやっという。犠牲になる人はもっと神聖視される。そのような倫理観は果たしてどこに由来するのか。

もしかすると、江戸時代の名残だったのかもしれない。赤穂浪士の切腹もそうだが、近松の心中物では男たちはくだらない理由で、くだらない女とばかり自殺する。死後に評判になるからである。しかし、なかにはそんな死に方にはまったく感心しない。

戦中と戦後の一時期にはそのような心情倫理はまだ残っていたらしい。いまの若い世代は果たしてどう思うのだろうか。

×月×日

高島俊男『百年のことば』（文藝春秋 一八〇〇円＋税）を読む。言うまでもないことだが、この本は本

誌連載中の「お言葉ですが」をまとめたものである。世人の言葉遣いに対するきびしいチェックの目と、誤字誤用法を指摘する毒舌ぶりは相変わらず健在だ。ただ、言葉の問題にとどまらず、言語表現を通して戦中と戦後の社会を回顧する内容にもなっている。もともと言葉は孤立した現象ではない。歴史や社会的な文脈の中で使われているものだから、言葉についての批評はれっきとした文明批評でもある。中でも童謡と小学唱歌についての批評は目を引くものがある。

本書によると、童謡と小学唱歌は四点ほどの大きな違いがあり、前者は後者に對する批判から生まれたものだという。なるほど、こうして両者の関係をわかりやすく整理すると、大正時代の子供観の一端が見えてきたような気がした。

この本を読んで気付いたことだが、童謡も小学唱歌も年取るらしい。長女は公立小学校に通っているが、「赤とんぼ」も「七つの子」も歌えない。まわりの子供

たちもみな同じだ。童謡という言葉も知らない。いまの子供たちは童謡にも小学唱歌にも興味がないらしい。外で遊ぶときも、お風呂の中でも、口ずさんでいるのは、「世界が一つになるまで」のような、今風の歌ばかり。

何年前に京都にある国際日本文化センターで小学唱歌に関するシンポジウムが開かれたことがある。発表した学者先生は唱歌をべた褒めしたあげく、その場で聴衆たちと合唱をし始めた。シンポジウム会場は一瞬にして、老人ホームになつてしまったようだ。じつは「昔の小学唱歌はいいね」と感嘆し、童謡や小学唱歌が童心をあらわしたものだと思っているのは高齢者に圧倒的に多い。彼らにとって、涙澆たに値する懐メロでも、子供たちにとってはただの「年寄り」の歌に過ぎない。めんこい遊び道具がある。日本では誰も遊ばなくなつた。童謡もおもちゃも言葉と同じように確実に年を取っていく。

今年の『私の読書日記』は、張競、立花隆、鹿島茂、池澤夏樹、米原万里の五氏が毎週交代で執筆いたします。